

# 『源氏物語』明石君物語試論

—「身の程」意識について—

齊藤みすず

はじめに

明石君の父明石入道は、さる大臣の子であり、光源氏の母とは従兄妹という間柄で、何故か近衛中将の職を捨てて播磨国の国司となり、そのまま土着して「世のひがもの」と言われながらも、零落した家格を再び回復しようとする堅固な意志を持つ人物である。母は中務宮の孫で、二人はもともと名門の出であったことが記されている。父の名門意識は明石君にも受け継がれていたようで、そのため誇りはあるが、播磨前司の娘で田舎者という「身の程」が、終始彼女を苦しめることになる。その「身の程」を負いながら、明石君が多年にわたる「卑下と忍従という意識的な自己否定<sup>注1)</sup>」を貫いた結果、源氏等の愛顧を得たことで自足の境涯に到達したように見える。

ところで、薄雲巻以降の明石君について、今井源衛氏は、「心中の葛藤については、もはや一言をも費してはいない」と言い、「上層者の要請に対し無抵抗に服する」「知的な自己防衛の態勢」を堅持し、「それ故、彼女の人間像には、青白い幽光の揺曳はあっても、赫突たる生命の燃焼感には乏しい」と結論付けている<sup>注2)</sup>。かつて「我身の程」

を嘆いていた明石君の心情描写が、どのように変質していったのか、彼女の行動、あるいは、周囲の人々の叙述にも注意を払いながら、明石君世界の内面深層を本文に添って見極めようと試みるものである。

## 一

「若紫卷」で紫上が初めて姿を見せる場面の直前に、源氏の従者良清によって明石入道のことを語られる。

かの国の前の守、新発意の、むすめかしづきたるいゑいといたしかし。大臣の後にて出で立ちすべかりける人の、世のひがものにてまじらひもせず、近衛の中將を捨てて申給はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、「何の面目にてか又みやこにも帰らん」と言ひて頭もおろし侍りにけるを、すこし奥まりたる山住みもせでさる海づらに出でゐたる（若紫―一五四―五）

「世のひがもの」明石入道は、代々の播磨の国司から娘への求婚も拒絶して、娘に「もしわれにをくれてその心ざし遂げず、この思ひをきつる宿世たがはば、海に入りぬ」（若紫―一五五）と常に遺言している、という。一族を土着する地方豪族で終わらせるつもりがない入道は、国司らには娘を与えまいとする。そのような思ひ上がった入道の考えを聞いた他の供人達は、「海竜はうの后になるべきいつきむすめなり。心高き苦しや」（若紫―一五五）と嘲り笑う。入道が国司からの娘への求婚を拒絶していたことは、須磨巻で「世に知らず心たかく思へるに、国の内は守のゆかりのみこそは、かしこき事にすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで、年月を経けるに」（須磨―三九）と語られている。又入道自身も、「女は心たかくつかふべきものなり」（須磨―四〇）と言っている。その後すぐ明石君について次のように紹介されている。

このむすめすぐれたるかたちならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人におとるまじかりける。身のありさまを、くちおしきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にもおほさじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ。命長くて、思ふ人くゝにをくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入なむ、などぞ思ひける。(須磨―四〇)

優れて美貌というわけでもない明石君は、都の高貴な人にも劣らない素質と教養を身に付けている。又一方では、「くちおしき」身分を思い知り、「高き人」は自分などを物の数にも思わないだろうことを十分に承知している。だが彼女は「ほどにつけたる」結婚を嫌い、両親の亡くなった後は出家あるいは海に身を投げようとまで思い込んでいる。明石君は父入道の計画に不安を感じながらも、気持ちの底に「高き人」との結婚を望む気持ちが無かったとは言えない。彼女自身、祖父が大臣であったことと、中務宮の血を引いていることの誇りを持っていたはずであり、それ故上流貴族的性格を好んで努力して身につけてきたのであろう。その一方では、現実には播磨前司の娘であり、田舎者であることが、「身の程」の自信のなさに繋がり、名門出身の誇りと意識の間の葛藤、それこそ明石君の生涯にわたって続いていくものであり、明石君の人柄を形づけているものであろう。

## 二

源氏と明石君とが初めて結ばれようとする時の源氏の心内を観察してみると、夕顔や空蟬に見せた激しい情熱は無く、入道の慎み深くはありながら、積極的に娘との結婚を熱望する姿に心を動かされ「心ばそきひとり寝の慰め」(明石―六九)に明石君を迎えようという。文のやり取りが始まって、明石君はその返しを書こうとはしなかつ

た。「はづかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきもはづかしうつゝまし。人の御程、我身のほど思にこよなく、心ちあしとて寄り臥しぬ」(明石一七〇) という明石君は、源氏の身分と物の数にも入らぬ自分の分際との距離が、あまりにもかけ離れていることが強く意識され、それが書くことを拒否しているのである。次の日、源氏から「宣旨書きは見知らずなん」(明石一七二) として、歌が送られてきた。明石君はその時も、「若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ。めでたしとは見れど、なずらひならぬ身の程のいみじうかひなければ、中々世にあるものと尋ね知り給につけて涙ぐまれて、さらに例の動なきを」(明石一七一) と、やはり書こうとはしなかった。明石君はここでも「なずらひならぬ身の程」が意識され、あまりにも源氏との身分の懸隔があることを意識しながらも、自分のようなものを人並みらしく扱ってくれる源氏を思い、涙ぐまずにはいられなかったのである。

散々迷ったあげくに明石君の書いた返事は、「手のさま、書きたるさまなど、やむごとなき人にいたうをとるまじう上ずめきたり」(明石一七二) と、源氏も驚くようなものであった。筆跡や歌に都の高貴な女性を思わせ、源氏も一段と明石君に心をそられるようになっていく。源氏は「人進みまいらば、さる方にもまぎらはしてん」(明石一七二) と、自分からではなく明石君の方から進んで参上するならば、それを言い訳にして目立たぬように事を運ぼうと思っていた。だが、明石君の方も、「やむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば」(明石一七二) とあり、「心くらべ」(明石一七二) の有様で時が過ぎていく。

秋になると、源氏はひとり寝もつくづく侘しくて、入道にも例のことを持ち掛ける。「とかくまぎらはして、こちまいらせよ」とのたまいて、渡り給はむことをばあるまじうおぼしたるを」(明石一七四) と自分から出かけることはとんでもないことと思っている。この源氏の言葉は、明石君との対等の者としての愛情を前提にした結婚で

はなく、彼女を召人程度の女としか見ていないことになる。<sup>注3)</sup> 対等の関係であるならば、男の方が女の家に出かけるのが常態であった。だがそれは、源氏は先帝の第二皇子であり、片田舎の前司の娘を正式な結婚相手として扱うことは到底考えられないことであった。だから源氏は「こちまいらせよ」と言ったのであり、源氏の家格からしてみれば明石君が源氏の前に出向くのは当たり前のこととして考えられていたのであった。一方、明石君の方も、「正身はたさらに思立つべくもあらず」（明石―七四）と、自分から出かけていく気はさらになかった。そして、

いとくちおしき際ゆる中人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にもおぼされざらん物ゆへ、われはいみじき物思ひをや添へん、かくをよびなき心を思へる親たちも、世ごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行末心にくゝ思らめ、中々なる心をや尽くさむ、と思ひて、

たゞこの浦にをはせん程、かゝる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、をろかならね。（明石―七四）  
と  
思っている。明石君の心高さと身の程意識は、「人数にもおぼされ」ないその程度の我が身であることをよく知っていて、源氏と結ばれることが結果的に惨めな境涯に陥ることを予想せずにはいられない。親達は及びもつかない夢のような望みを自分にかけているが、そのような望みが叶うものかどうかかわからない。むしろ、慰み者になるよりは、結婚を断念し、源氏が明石浦にいる間だけ手紙のやり取りで終わる方がよいと思うのであった。そして、評判高い源氏を、ほのかなりとも見て、心惹かれてもいるのだが、明石君に流れている名門の血が「召人」となることを拒ませるのであった。

結局、源氏が根負けして、入道の案内のまま明石君の住む館に訪れ、明石君と結ばれる。そこで源氏は彼女に「近まさり」を感じ、「こよなうも人めきたる」（明石―七六）<sup>注4)</sup> と思い、「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとうおぼえたり」（明石―七七）というような、高貴な女性と変わらない明石君の凛とした上品さを見つけている。

だからといって、源氏が明石君を対等な結婚の相手と思っている訳ではなく、明石の地にいる間だけの「ひとり寝の慰め」として扱おうとしていることに変わりはない。源氏は明石君との結婚を極力世間に漏れないように、彼女のもとに通うのも途絶えがちになる。そのため明石君は勿論のこと、両親も心を痛めている。

思しもしるきに、いまだまことに身も投げつべき心ちする。行末みじかけなる親ばかりを頼もしき物にて、いつの世に人なみ／＼になるべき身と思はざりしかど、たゞそこはかとなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじう物思はしき世にこそありけれ、とかねてをしはかり思ひしよりもよろづにかなしけれど、なだらかにもてなして、にくからぬさまに見えたてまつる。(明石―七九―八〇)

明石君の痛切な思いは、いつの日か「人なみ／＼に」なれるとは思わなかったけれど、源氏と契りを結んだばかりに「物思はしき世にこそありけれ」と思うもので、明石君の「身の程」故の深い悲しみがここに表されている。こうした惑乱の態にありながら源氏に恨み言を言うわけではなく、「なだらかにもてなして、にくからぬさまに見えたてまつる」という明石君の冷静に身を処す姿勢が示されている。それが源氏の望む理想の女性の姿であって、彼女を「あはれとは月日に添へておぼし」(明石―八〇)勝らせることになるのである。

こうした明石君の姿勢は、男性が求める妻のあるべき姿であったかもしれないが、例えば、それは帚木巻の女性の品定めをする場面で語られる男性の経験談からも窺える。

かくおぞましくはいみじき契り深くとも絶えて又見じ、限りと思はばかくわりなきもの疑ひはせよ、行く先長く見えむと思はばつらきことありとも念じて、なのめに思ひなりて、かゝる心だに失せなばいとあはれとなん思ふべき、人なみ／＼にもなり、すこしおとなびんに添へてもまた並ぶ人なくあるべき(帚木―四七)

これは源氏、頭中将、左馬頭、藤式部丞などの議論の中での、左馬頭の話である。妻の嫉妬を非難し、もしこれ

以上嫉妬するならもう通ってこない、夫の浮気があるとしても我慢して、これが普通のことだとして嫉妬を棄てるなら、しんから愛しいと思うことだろうと言う。この発言について、男性の身勝手な発想と捉えることも出来るが、明石君が源氏の夜離れに恨み言を口にすれば、おそらく源氏との間は取り返しのつかない結果となったことが想像される。それよりも、源氏の容姿、容貌、振る舞いなどは、明石君にとって大いに魅力的なものであり、源氏に心惹かれる気持ちが大きくなればなるほど、彼との縁がたとえ明石の浦で終わることがあっても、「身の程」故にそれで満足すべきなのだと思っている。今は、父入道の計画の実現の為よりも、自分の眼前の幸福の為に「身の程」を弁え、源氏に恨み言を言うまいとするのである。

### 三

明石君との結婚から一年程たった時、源氏に召還の宣旨が下る。源氏の明石君に対する愛情は、懐妊したために次第に深くなっていき、彼女の許に夜離れなく通うようになる。いよいよ上京予定の前々夜、源氏は最後の別れをするために、いつもより早く明石君のもとを訪れる。

さやかにもまだ見たまはぬかたちなど、いとよし／＼しうけ高きさまして、めざましうもありけるかな、と見捨てがたくくちをしうおぼさる。さるべきさまにして迎へむとおぼしなりぬ。さやうにぞ語らひなぐさめ給。

#### (明石―八二)

灯影に照らし出された明石君の気高く美しい姿を見た源氏は、明石君をこの地に残して都に帰ることの苦しさを、初めて明石君を京へ迎えようというのである。それを聞いた明石君の気持ちは次のようである。

おとこの御かたちありさま、はたさらにも言はず、年ごろの御行ひにいたく面瘦せ給へるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心ぐるしげなるけしきにうち涙ぐみつゝ、あはれ深く契給へるは、ただかばかりを幸ひにても、などかやまざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、我身の程を思ふも尽きせず。(明石―八二―三)

源氏に愛されているという満足と喜びの深さが語られているが、それと同時に、源氏が立派であるだけに、その人に似つかわしくない「我身の程」を思い知って、悩みは尽きないのであった。源氏は今回別れても、何れ一緒になろうと誓うのであるが、明石君としては、源氏の言葉通りに受け取ってよいものかどうかという懸念もあったのであろう。その言葉に対して彼女は、「いまはかひなきうらみだにせじ」(明石―八三)と涙せずにはいられなかったのである。

源氏が京に去った後、明石君の嘆きは深く、「身のうきをもとにて、わりなきことなれど、うち捨て給へるうらみのやる方なきに、たけきことはたゞ涙に沈めり」(明石―八六―七)と、今まで全ての成り行きが、もともと身分の不釣り合いによって起こった必然の結果として、どうにもならぬことと諦めようと努める一方で、自分を打ち捨てていった源氏への恨めしさは紛らしようもない。明石君は自身の不幸な結婚の本質を察し、源氏の愛情にも今やほとんど期待が持たなくなってきた。また明石君だけではなく、一族の人々の救いようのない落胆する様子が描かれ、その中で娘の懐妊に一縷の望みをかけ、源氏の愛情を期待する入道は、娘の悲しみを慰めかねる母君や周囲のものから、非難と嘲笑を受けねばならなかった。その彼自身も、自分が娘を源氏に娶せたことの結果が、娘を不幸に追いやってしまったことの責任を強く感じ、精神状態がおかしくなって呆けてしまったとある。この入道の動顛する様には、源氏を信じようとするその期待が、不確かなものであったことを物語るものとなっている。



翌春、明石君は姫君を出産する。その事を聞いた源氏が、姫君に大きな期待をかけたのは、宿曜の予言が的中するように見えたからであるという。

「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申たりし事、さしてかなふなめり（濔標―一〇〇―一〇一）

この予言にある東宮が即位したことについて、冷泉帝が源氏の実の子だという真相を世間の人の知るところではないが、それも何とか知られずに即位されたこと、それに、葵上腹の夕霧がやがて太政大臣になって人臣の位を極めるであろう、そうしたことに源氏は自信を深めたところであっただけに、この姫君こそ后がねになることを確信したのであろう。

今行く末のあらましごとをおぼすに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひが／＼しき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界に生まれたらむは、いとをしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん（濔標―一〇一）

ここにきて源氏は相人の予言は空しくなかつたと思ひ、及びもつかない高い望みを持った入道に同感し、明石君を京へ迎える決心をする。源氏は故桐壺院の宣旨の娘を姫君の乳母として明石へやり、紫上には姫君を迎えることを告げる。又、姫君の五十日の祝いに使者を遣わし、その手紙の中に、「心のあくがるゝまでなむ。猶かくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ち給ひね。さりともしろめたき事は、よも。」（濔標―一〇七）といひ、本格的に上京を促すものであった。入道は、都に向かつて「おがみきこえて」（濔標―一〇四）泣いて喜んだという。そして、都から来た乳母から、源氏の日常の有様や、権勢のすばらしさを聞かされて、

げにかくおぼし出づばかりのなごりとゞめたる身も、いとたけくやう／＼思ひなりけ

り（濔標―一〇七―八）

と、明石君は自分の運の強さに自信を持つようになるが、その年の秋、例年の住吉詣でに出かけ、源氏の住吉詣でに行きあわせてその盛大さに圧倒され、またしても「身のほどくちをしう」（濔標―一一三）思うことになる。明石君の受けた打撃は大きく、自分と源氏の住む世界の違いをまざまざと見せつけられて、再び自信を喪失してしまう。源氏からは、京に辿り着くか着かぬかに、「このごろのほどに迎へむ」（濔標―一一七）と言ってきたが、明石君は源氏の生活圏に入った場合の自分の扱いがどのようなものになるかを思い煩う。

女は猶わが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむごとなき際の人／＼だに、中／＼さてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つゝ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてか、さし出でまじらむ、この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれめ、たまさかにはひ渡り給ふついでを待つ事にて、人笑へにはしたなきこといかにあらむ、と思ひ乱れても、またさりとて、かゝる所に生ひ出で、数まへられ給はざらむもいとあはれなれば、ひたすらにもえうらみ背かず（松風―一九〇―一）

右の心内語に示されているように、世間から認められていないに等しい「わが身のほど」であることが、わが子姫君の不名誉になることを恐れるのであり、姫君が「数まへられ給」ためには、源氏を一途に恨みとおすことも出来ない。明石君は妻としての期待よりも、姫君の幸せを望む母親としての現実的な強さを持ち始めている。

源氏と別れてから丸三年目に明石君はようやく上京するが、源氏の勧める二条東院ではなく母方の所領の大堰の邸に移ることになった。大堰の邸に源氏を迎えるようになって、新たに源氏の心の中に明石君の占める位置は大きくなっているように思われる。源氏は久方ぶりに会った明石君のねびまさった姿に、あらためて心惹かれ、上流貴婦人にも劣らぬ気品と優雅な風情を備えていることに満足している。一方、源氏の愛情には、初めてみる姫君の存

在が大きく作用していたことも否めない。源氏は美しく可愛らしい姫君を「隠ろへたるさまにて生いいでむが、心ぐるしうくちをしきを、二条の院に渡して心のゆくかぎりもてなさは、後のおぼえも罪免れなむかし」（松風―二〇三）と姫君を紫上の手で育てることの決心も固まった。そして、源氏が明石君のもとを訪れるのは、僅かに月二度ほどであったのを、「年の渡りにはたちまさりぬべかめるを、およびなきことと思へども、猶いかゞもの思はしからぬ」（松風―二二〇）と語り手は同情をする。最早、二人の間には身分の差が大きく立ち塞がり、明石君が源氏の愛を得ようとすることは及び難き事であったのである。

冬になって源氏の度々の二条東院への入居の勧めに、「つらき所多く、心みはてむも残りなき心ちすべきを、いかに言ひてか」（薄雲―二一六）と、引き移った後で、これまでの生活以上に源氏に冷遇されることを思い惑っている、源氏は次のように決断を迫る。

さらばこの若君を。かくてのみは便なき事なり。思心あればかたじけなし。対に聞きをきて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着の事なども、人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ（薄雲―二一六）

源氏は決して高圧的に言ったのではない。この言葉が明石君を苦しめることになることは察していた。だが、姫君の将来のためにはこのことは断じて言わねばならなかったのである。明石君はある程度は覚悟はしていた事とはいえ、我子を手放すことの苦しみは耐え難いことであった。

わが身はとてまかくてもおなじ事、生い先とをき人の御上も、ついにはかの御心にかゝるべきにこそあめれ、さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし、と思ふ。又手を放ちてうしろめたからむこと、つれくも慰む方なくては、いかゞ明かし暮らすべからむ、何につけてかたまさかの御立ち寄りもあらむ、などさまくゝに思乱るゝに、身のうき事限りなし。（薄雲―二一七）

明石君は我子の将来を考え、源氏の求めに従おうかと思う一方で、子を手放した後の寂しさや、それによって源氏の訪れが今よりさらに間遠になるに違いないと思ひ悩み、「身のうき事限りなし」と嘆く。その源氏の意向に苦悩する明石君に、母尼君は次のように述べている。

見たてまつらざらむ事は、いと胸いたかりぬべけれど、つゝにこの御ためによかるべからん事をこそ思はめ。  
 (中略) 母方からこそ、みかどの御子もきわ／＼におはすめれ。このおとゞの君の、世に二つなき御ありさまながら、世に仕へ給は、故大納言のいまひとときざみなり劣り給て、更衣腹と言はれ給しけぢめにこそはおはすめれ。(中略) たゞまかせきこえ給て、もてなしきこえ給はむありさまをも聞き給へ(薄雲―二二七―八)

尼君も源氏の例を挙げ、母親の身分がいかに子供の将来を左右するかを説き、だからこそ姫君の将来のために紫上に託すよう説得する。須磨・明石巻では、娘を源氏に縁付けようと奔走する入道に母君は、「おほやけの御かしこまりにて、須磨の浦にもやし給なれ」「やむごとなき御妻どもいと多く持ち給ひて、そのあまり、忍び／＼みかどの御妻さへあやまち給ひて」(須磨―三九)「なか、めでたくとも、もののはじめに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとゞめ給ふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじきことなり」(須磨―四〇)など、源氏の京での噂話を話題にし、入道の無謀な野心を笑った尼君も、いまや源氏の妻(妻と言えるかどうか)となつた娘に、源氏を信頼し姫君を引き渡すことを強調する。迷つた挙句、占いしてもらつたうで、「渡り給てはまさるべし」(薄雲―二一八)と言われ、明石君の心は挫けてしまう。

よろづの事、かひなき身にたぐへきこえては、げに生ひ先もいとをしかるべくおほえ侍を、立ちまじりても、いかに人笑へにや(薄雲―二一九)

これは源氏に「御袴着の事は、いかやうにか」(薄雲―二一八)と聞かれたことへの、明石君の返事である。彼

女は我身の程と、姫君の将来を熟慮した末に、姫君を手放すことを決意した。この後、十二月の雪の降る日、縁近くで汀の水を眺めて、物思いに耽りながら涙を落とす明石君の姿を、女房達は「限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめ」(薄雲—二二〇)と評している。「限りなき人」に劣らぬ明石君を、こうまで苦しめているのは、彼女の「かひなき身」という「身の程」によるものであった。

源氏が姫君を引き取りに大堰の邸に来訪した時、明石君は「さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ」(薄雲—二二〇)と、姫君との別れは誰の所為でもなく、自分の所為だと思っている。彼女は、母でありながら母としての地位がまともに与えられない「身の程」というものが、自分だけでなく姫君に対してもいかにものをいうかを思い知るのである。その明石君を慰める源氏に「何か、かくくちおしき身のほどならずだにもてなし給はば」(薄雲—二二一)と言って、後は涙に暮れるばかりであった。明石君の心情を思いやる源氏は二条院へ向かう途中で、「いかに罪や得らむ」(薄雲—二二二)と感じずにはいられなかった。子供を手放して、はるか遠くで生活している子を恋しく思う明石君の心情を思うと、源氏は「いとおし」(同)と思い、明石君に対して前にも増して思いやり深く振舞うようになるのである。こうして、姫君は二条院の紫上の養女になったことで、后としての将来が約束されたのであるが、その代わり明石母子の別離の悲しみが、源氏に罪の意識を抱かせたのである。

姫君との別離から、明石君は冷静に身を処していく姿に変化していくようである。

かしこには、いとのだやかに心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまもやう離れめづらしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとにやむことなき人くなどに劣るけぢめこよなからず、かたち、用意あらまほしうねびまさりゆく。たゞ世の常のおぼえにかき紛れたらば、さるたくひなくやと思ふべきを、世に似ぬ

ひがものなる親の聞こえなどこそ苦しけれ、人のほどなどはさてもあるべきを、などおぼす。(薄雲—二二—六)

と、源氏は明石君が見るたびごとに高貴さを増していくのに感動をし、明石君が「ひがもの」入道の娘でさえなければ、姫君の母として、正しき妻として扱うことも出来るのだが、という気持ちになっている。何れにしても、源氏は明石君を心底から恋しく思っているわけではないが、彼女の身の程相応に「をしなべてのさま」(薄雲—二二—六)に遇したりはせず、彼女を破格なほどに重んじている。最早、明石浦にいた頃の「心ぼそきひとり寝の慰め」としての扱いは出来なくなっており、明石君は源氏の生活の中で無視することの出来ない存在となっている。

女も、かゝる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりとおぼすばかりのことはし出でず、又いたく卑下せずなとして、御心をきてにもて違ふ事なく、いとめやすくぞありける。(薄雲—二二—七)

明石君のその後の生活における源氏との間の態度は、自分の分を守り、度の過ぎた卑下もせず、という源氏の「御心をきて」に従うことである。彼女は「身の程」を弁えながらも精一杯源氏の妻として、姫君の実母として誇り高く暮らすことが、もっとも懸命な身の処し方であることを理解していたと言える。このような態度こそが明石君の「めやす」さであり、これ以後の六条院移転後の彼女の基本的な態度となってゆく。

#### 四

少女巻後半には、「六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町を込めて造らせ給」(少女—三二—二)とあり、六条院造営の記述が為される。その六条院に女君達が移った後、「数ならぬ」身分である明石君は、六条

院にいつとも知られぬようにこっそりと移っている。

六条院の新春に、源氏が明石君の許を訪れた時の彼女の態度について、「身づからのもてなしはかしこまりをきて、めやすきよそい」(初音―三八三―四)であったことが、源氏の目を通して語られているが、ここにも彼女が源氏の生活圏に入ってから、さし過ぎず、卑下もしない生活態度を一貫して守られていることに気が付くであろう。こうした明石君の態度は、野分の翌朝にも見ることが出来る。「箏の琴を掻きまさぐりつゝ、端近うるたまへるに、御前駆をふ声のしければ、うちとけなへばめる姿に、小桂ひきおとして、けちめ見せたる」(野分―四六)明石君の源氏に対する礼儀の仕方である。その彼女を見て「いといたし」と源氏は満足する。明石君は源氏の「御心をきて」に従うことが源氏の愛情を繋ぎ止めることになり、己の「身の程」を弁えることによって、六条院での居場所を見出そうとするのである。

姫君の東宮入内の折、紫上の濃やかな心遣いによって、ようやく明石君にとって光榮の日を迎えることが出来たのである。

其夜は、上、添ひてまいり給ふに、さて車にも立ち下りうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、たゞかく磨きたてまつり給ふ玉の疵にて、わがかくながらうるを、かつはいみじう心ぐるしう思。(藤裏葉―一八九―一九〇)

姫君の後見役としての明石君は、姫君と紫上の輦車に同乗できず、一步退いて徒歩で付き添うことの世間体を思うと共に、自分の卑しい我が身をいやという程思い知らされる。こうした明石君は、自己嫌悪に陥りながらも、源氏の「御心をきて」に従い、苦惱を乗り越えようとする。

三日の儀を済ませ退出する紫上に代わって、明石君は参内し、その時初めて紫上に対面する。紫上は「物などう

ち言ひたるけはひなど、むべこそは、とめざましう見給」(藤裏葉——一九〇)と、明石君の侮り難い人柄を見て感心する。一方明石君は、

いとけ高う盛りなる御けしきを、かたみにめでたしと見て、そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まり給けるも、いとことはり、と思ひ知らるゝに、かうまで立ち並びきこゆる契をろかなりやは、と思ふ物から、出で給ふ儀式のいとことによそほしく、御手車などゆるされ給て、女御の御有様に異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身のほどなり。(藤裏葉——一九〇〜一)

と、紫上の氣品に満ちて美しい姿を称賛し、彼女と肩を並べられる自分の宿世の高さに自信を持つが、又すぐその後では、紫上には到底及ばぬ我「身の程」をいやというほど思い知らされるのである。だが、明石君は、紫上の自分に対する優位な立場を認め、決して恨みがましい発想はしていない。

そうした彼女の人柄を称賛する言葉は、度々記されている。

御仲らひあらまほしうちとけ行に、さりとてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなし、はたつゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま心ばへ也。(藤裏葉——一九二)

紫上と明石君の仲がこの上なく睦まじくなっても、明石君は出過ぎて馴れ馴れしいところはなく、蔑まれるような態度は見せることはないという。

やがて、女御は男御子を出産。皇子誕生という明石君の内心の歓喜とは裏腹に、己の「身の程」ゆえに彼女は典侍と共に御湯殿に任せ、迎え湯の役にまわる。この明石君の姿に、阿部秋生氏は、「女御の実母としてではなく、女御に仕へる女房、召人としてこの役に奉仕していることになりかねない」と言われる如く、「人の親めきて」(若菜上——二七三)若君を抱いて立つ紫上の姿とは、あまりにも対照的である。その折の明石君の態度に典侍は深く心



打たれて、「すこしかたほならばいとおしからましを、あさましくけ高く、げにかゝる契ことにものし給ける人かな」(同)とみている。これは六条院の厳しい秩序のもと、無償の愛情を注ぐ唯一の方法としての、明石君の態度であったのであろう。続いて、

御方の御心をきての、らうくじくけ高くおほどかなる物の、さるべき方には卑下して、にくらかにもうけばらぬなどをほめぬ人なし。(若菜上―二七四)

と、しかるべき時には人に譲って、出しゃばってはならない、という限度をよく心得ていた明石君の身の処し方を、世の人々も誉めぬ人はいないとある。

若宮誕生のことを伝え聞いた明石入道から、明石君に長文の手紙が届けられた。そこに記されていたことは、明石君が母君の胎内に宿った頃の入道の見た靈夢について、子孫が将来の天皇・皇后になる事を予告されたというものである。そして、三十余年も昔に志した宿望が叶う時が来て、不用の人物となった今、夢の指示するままにこの世の榮華を捨てて、深山に入って修行に専念するという。明石君は、「この御夢語りを、かつは行先頼もしく」(若菜上―二八〇)思うものの、死を覚悟しての入道の入山に、ついに会えずに別れてしまうことの悲しみに涙する。そして、父入道がなぜ身分違いの結婚を自分に勧めたのかを、文を見て初めて理解したのである。明石尼君も思いは同じで、夫人道との別れに涙する。

君の御徳には、うれしくをもだたしきことをも、身にあまりて並びなく思侍り。あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそ侍けれ。数ならぬ方にてても、ながらへし都を捨てて、かしこに沈みろしをだに、世人にたがひたる宿世にもあるかな、と思ひはべしかど、生ける世に行き離れ、隔たるべき中の契りとは思かけず、おなじ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて、年月を過ぐし来て、にはかにかくおぼえぬ御こと出で来て、背きにし世に

たち返りてはべる、かひある御事を見たてまつりよろこぶものから、片つ方にはおぼつかなく、かなしきことのうち添ひて絶えぬを、つゝみにかくあひ見ず、隔てながらこの世を別れぬるなん、くちおしくおぼえはべる。

(若菜上―二八〇―)

明石君と源氏との結婚によって、喜びもあつた一方で、辛く悲しい思いも極めて多かつたという彼女の述懐には、夫入道との「おなじ蓮に住むべき後の世の頼み」も潰えてしまった不幸な結婚生活を嘆くものとなっている。又、明石君は「人にすぐれん行先のこともおぼえずや。数ならぬ身には、何事もげざやかに、かひあるべきにもあらぬ」(若菜上―二八一)と、いくら世人に称賛されようと「数ならぬ身」である以上、何事も甲斐のない身の上であることの悲しみを語る。彼女はいま、肉親との愛情を犠牲にし、卑下と忍従を貫くことでようやく得られた現在の身の上の榮華が、いかに空しいものであるかという思いを抱いている。

明石君は、たまたま訪れてきた源氏に入道の手紙を見せる。源氏は、入道の遺言と願文を誦んで、入道の深い志を誉め、入道の手紙の「この夢のわたりに目とゞめ給ふ」(若菜上―二八七)のであつた。

この君の生まれ給し時に、契深く思知りにしかど、目の前に見えぬあなたの事は、おぼつかなくこそ思わたりつれ(同)

と、明石女御の誕生の際に確信された宿曜の予言(前掲 落標―一〇〇―一〇一)とまさしく重なることに改めて明石君の一族と自分との間が、目に見えぬ縁の糸でつながっていたことを知る。

尼君から自分の出自を聞かされ、紫上が継母であることをはっきり認識するようになった女御の気持ちだが、明石君の方に寄ることを懸念した源氏は、女御に「いまはかくいにしへのことをもたどり知り給ぬれど、あなたの御心ばへをおろかにおぼしなすな。」(若菜上―二八八)と言って、紫上の女御に対する愛情の深さは並々ならぬもので

あることを語る。明石君には、

とりもちて掲焉などあらぬ御もてなしどもに、よろづの事なめにめやすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。(若菜上―一九〇)

と、明石君が取り仕切って親顔など振舞わないことを誉めながら、その取るべき態度を説く。源氏のその言葉の底にあるもの、それは明石君を女御の母とは認めないし、紫上とは対等の人格としての振る舞いを許さないということ、明石君は十分に心得ていた。明石君の「さりや、よくこそ卑下しにけれ」(若菜上―二九〇)との言葉には、源氏と巡り合って以来今日まで、終始我身の程を痛嘆しながら、悲喜の感情を押し殺してきた日々であったことを物語っている言葉であったと思う。

明石君が、光源氏の紫上への愛情が深まっていくのに対して、女三宮に対する愛は薄いことを観察して、それにつけても我宿世の高さを思う一節がある。

我宿世はいとたけくぞおぼえ給ひける。やむごとなきだに、おぼすさまにもあらざる世に、ましてたちまじるべきおぼえにしあらねば、すべていまはうらめしきふしもなし。(若菜上―一九〇)

自分は紫上や女三宮と肩を並べて源氏の愛を競いうる立場でないだけに、「うらめしきふしもなし」というこの言葉は、一応は六条院における彼女の安定した境涯を示している。しかし、予言実現の為に、源氏との夫婦関係の在り方を知って、かえって深い欠落感と空虚感を彼女は覚えているのではないだろうか。それに、女御の生母、若宮の祖母として表に立てない我身の口惜しさは、誇り高い明石君の心を深く傷つけているであろうが、彼女はこうした自身の内心を決して源氏に見せることは無い。源氏の「御心をきて」に従い、決して取り乱すことのない知的な女性、これこそが作者の最も理想とする女性の姿であったのかもしれない。

## 結び

以上、源氏と明石君との愛情関係を基に、明石君という人物の意識を見極めようとした。その明石君の人物造型において、「身の程」意識がその核になっていることについては、すでに多くの分析がなされている。<sup>(註5)</sup>明石君の「身の程」意識は、明石入道の人物像と、上層貴族からの零落という経歴の特異さによって性格付けられたとも言えるであろう。

明石君の物語の由来は、明石君が母の胎内に宿った頃に明石入道が見た一夜の奇夢に発している。その夢の内容は、子孫が将来の天皇・皇后になることを予告されたというものである。その住吉の神意を信じ、一族の再興を願う入道が、明石君に宛てた手紙には、皇子誕生による目出度さが、他でもない明石一族の為のものであったということが示されていた。この目出度さに至る過程で、都に召還される源氏との別れ、生まれた姫君を紫上の許に連れ出される時の明石君の悲嘆する姿は、哀切を極め、読者の涙を禁じ得ないものであった。更に、入道の入山における告別は、彼の妻に結婚生活の不幸を嘆かせ、明石君も父入道の為に痛嘆する。こうした明石一族が、たとえ上層的栄誉の獲得に至ったとしても、彼らが「身の程」故に様々な負い目を担い、それに伴う不安や苦悩を余儀なくされる者であったことが、極めて写實的に描かれている。一方では、明石君を上流女性に引けを取らない嗜み深い女性として称賛する言葉が所々に配されている。例えば、「あてはかに、心ばせあるさま」の「やむごとなき人におとるまじき」姿は、明石君の内に潜む父祖伝来の自負心が現われたもののようにも思える。更に、「いとよし／＼しうけ高きさま」「御子たちと言はむにも足りぬべし」等と評されるその姿は、姫君との別離から明石君は冷静に

身を処していく過程で培われたものであった。明石君が最後に言及される匂宮巻では、「六条の院の春のおとゞとて世にのゝしる玉の台も、たゞ一人の御末のため成けり」(匂宮―二一四)と語られ、明石君が多くの孫たちの面倒を見ている穏やかで微笑ましい姿が描写され、六条院は明石君の一族の為と書かれることによって、存在感のある明石君の姿が描き出されることになる。こうした明石君の身分による内面の苦悩と、「幸い人」としての人生を描く作者には、下層貴族である中の品の女性に対する深い思い入れがあったと思うのである。

\*本文の引用は柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新日本古典文学大系 源氏物語』(岩波書店 平成二四年)に依拠し、その巻名と頁数を記した。

注

- (1) 今井源衛『改訂版 源氏物語の研究』(未来社 昭和三七年)
- (2) 注(1)に同じ。

(3) 阿部秋生氏は、『源氏物語研究序説』(東京大學出版會 昭和四三年)の中で、「二人の男女が契りを結ぶ時、女性が男性のもとを訪れるといふ形式は、當時の正常な結婚にはなかったことである。男性が女性のもとを訪れることが正常な、又対等の結婚であった」として、「召人」と称された女性たちの例を挙げて詳しく述べている。さらに呼称について「御方」と「上」の使用例から、「御方」と呼ばれるだけで、「上」と呼ばれることのなかった女性は、「上」の支配下にあったことを指摘し、明石君は「上」とは一度も呼ばれなかったことから、彼女は「召人と妻との中間ぐらいの地位」であったと定義付けている。又、清水婦久子氏は、明石の地を基盤とする財

力がある為、源氏の勧める二条東院を拒否して大堰邸に移ったことに対し、「源氏の経済下に置かれることを拒んだ」とされ、又「御方」という呼称については、「方向を示す語に「御」が付されているのであるから、「うへ」の様に直接の主従関係を示すのではなく、外側からの敬称」であり、「御方」という呼称は「「うへ」に決して劣らない敬称」であるとされている。「源氏物語の人物呼称―「うへ」と語りの問題―」（『論集中古文学』 源氏物語の人物と構造』笠間書院 昭和五七年）

(4) 注(3)（阿部秋生氏）に同じ。

(5) 注(1)、注(4)に同じ、藤原克己「たけき宿世―明石の君の人物造型―」（『国文学解釈と鑑賞 別冊』『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂 平成十年）